

## 交渉の衝突：論説

著者	巴城生
雑誌名	龍南會雜誌
巻	33
ページ	3-8
発行年	1895-01-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4509">http://hdl.handle.net/2298/4509</a>

合す故に孔子以て進むべければ則ち進み以て退くべければ則ち退き以て久ふすべければ則ち久ふ  
之<sup>○</sup>以て速にすべければ則ち速にす之を用ゆまば則ち行ひ之を舍つまば則ち藏す此れ孔子の身全体  
皆易きなり

## 交渉は衝突

巴城生

吾人の平常關係すべきとに於て、繁多なること自他交渉に如くものあり。或は親子の關係と云ひ、或は兄弟夫婦の關係と云ひ、將又他人と自己との關係と云ひ、悉く皆自他の交渉にあらざるはあらず。吾人は深山幽谷に隱遁せる仙僧にあらざるよりは、必ず此交渉を有し、絶たんと欲して絶つ能はざる、又切らんと欲して切る能はざる羈絆たり。

社會に現出し來る争亂、紛紜、戰鬪、嫉妬、讒謗等總て常經に外れたるとは、畢竟自他交渉の圓滿からざるより結果す。世に所謂罪惡過失と稱するものは、實は自他交渉の衝突に外ならず。

親子、夫婦の交渉の如きは、親密にして和睦せる情愛、其間に成立せるを以て、其交渉も亦た至て完きを待れども、稍血縁を遠くし、利害を異にするものに至りては、交渉も願はしく纏らず、必ずや其間多少の行違あり。『兄弟喧嘩』ある語は人生の薄情を警告せる標語にあらざるや。兄弟の間、既に争亂を生ずる傾向あり、況や他人同士の間柄あるに於てをや。或は嫉妬し、或は反目し、或は排擠するに至る、亦た止むを得ざる所。

吾人は人類として、種々の目的を有せれども、之を大別して二とをすを得。第一は獨立の自己とて、世界に生存を維持することにして、第二は社會の分子とて、世界に生存を維持することなり。而し

て兩者其權衡を失ふ可らず。抑も吾人は一個の人類なまば、適者生存の法則に従て、自己の生存を計ること最も必要あり。例へば自己を害する事情を除き、其生存を傷くる位地を去り、以て進一步を凌ぐとを努むるが如きは、是れ人間進歩の基礎として、欲ぐ可らざる所のものなり。然れども社會は吾人の生存を完全にする一法として組成しあれば、社會に對しても亦た義務を負はざる可らず。即ち社會の進歩發達に利あるものに從ひ、害ある者を避け、社會の幸福と健全とを企圖實行せざる可らず。この自己の生存と社會の進歩との關係に於て、密接なる調和あくんば、現世は人類として生存する價値なるべし。

試に佛國革命時代に於ける戰慄時代を看よ、又亞弗利加内地の食人々種を見よ。人間の品位果して何くにかある。彼等は人類とて其榮譽を荷ふに足らず。之を聞く、人類は体形上より之を云へば、猿猴と相距る一步のこと。彼等は精神的にも、殆んど猿猴と伍を同ふするものと謂べし。

蓋し自己の生存と社會の進歩との二個目的の權衡を得る能はざるが故に、此忌はしき結果あるものあり。夫れ然り、吾人自己獨立の生存を維持すると同時に、社會に立て社會的交渉を完ふせんとすること、誠に困難なりと謂はざる可らず。

『社會の罪惡は何より生ずるか』の問題は、古來種々に議論せらまたり。余は信ず、罪惡あるものは、犯罪者が自己の爲めに、他人の領分に侵入するより發生す。換言すれば、自他交渉の亂雜より現出する結果に外ならず。例へば一國あり、他の國より權利を侵害せられたりとせば、忽ち其間に交渉の衝突を來し、終に是非曲直を論議し、干戈に訴ても敵を降服せざれば休まず。個人と個人との間の交渉亂雜なるに至るも亦た此理に外ならず。

競争は進歩の媒介あり、競争は活動を生じ、活動は元氣を振作し、元氣は健全を致し、健全は發達の基とある。競争豈に有害無用のものならんや。抑も競争は之を誘起する原因一にして足らずと雖も、主として羨望の情と名利の慾とより發するものあり。言ふ勿れ、名利の慾羨望の情賤むべきものありと、吾人羨望の情、名利の慾は人生の行路に缺く可らざるものあるを信ず。失望して挫折せず、失敗して落膽せず、艱難に處して益々勇奮猛進する氣象を惹起するものは、即ち其位地に甘せず、仰では益々攀んことを欲え、望ては愈上奔らんことを欲し、漫々たる希望を以て榮譽の月桂冠を得んと欲するに原因す。故に吾人は決して競争を非とし、之を自まつて害毒ありとするものにあらず、然れども自他交渉の圓滿を保全するには、多少競争の方法、度合に於て考察する所ある可らず。然らずんば競争は終に社會の擾亂を來すに至らん。他言を以て之を云へば、羨望の情や、名利の慾は人生に缺く可らざるものなれども、自他交渉の際には、非常の注意と斷乎たる果斷とあるにあらずんば、社會の分子として、生存を維持する目的に適合する能はざるべし。

前述の如く、吾人は一個獨立の生活を爲すと今時に、社會的生存を爲すものあり。果して然らば、吾人は種々雑多の關係羈絆に隨從せらるゝ、是れ決して免る可らざる數あり。吾人は、此間に於て自己と他人との衝突多きを見、自他交渉の如何に困難にして、又如何に苦心多きものなるやを嘆息せずんばあらず、吾人は今自他交渉の衝突の原因を總合えて、之を一に歸せんと欲す、即ち自他性情の行違、換言すれば感情の衝突は、其交渉をして破壊せしめ、相互に反目せしむるに至るものあり。

管仲始め困める時、嘗て鮑叔と賈す。財利を分て多く自ら與ふ、鮑叔彼を以て貪とみさす。彼嘗て鮑叔の爲に事を謀て更に窮困す、鮑叔彼を以て愚とみさす、彼嘗て三たび仕へ、三たび君に逐はる、鮑叔彼

を以て不肖とあざす。彼嘗て三たび戦ひ、三たび走る、鮑叔彼を以て怯となさす。管鮑の交際何が故に斯く親密ありしぞ。吾人は之に因りて知る、圓満なる交渉には、水魚も畜ちらざる性情存立せざる可らざることを。此間の消息に至りては、彼の利を以て離合し、説を以て向背する者の到底窺ひ知る能はざるものあり。

米國建國の際、シモン、アダムスは合衆黨に屬し、トーマス、シェンファーンソンは反對の黨派に屬せしが、其間の交渉に於ては毫も衝突せることなかり、一堂に提携して談笑し、宛ら兄弟の親愛あるが如くありき。之を彼の政黨鬪牛角上の紛爭擾亂に比し來れば、果して何如に。吾人は此點に於ても、交渉の衝突は感情の行違より發生するものなることの証を得。

二人の學生が、一堂に於て全し教程科目を學び、全し生活を爲して、尙ほ其間に一物の介立せるものあるが如きを見るところあり。彼等は互に談話せざるにあらず、互に放言せざるにあらず、互に打興せざるにあらず、互に貸借して少しも吝ならず。此の如くにして而も氷結して溶けず、親和せんとするを妨ぐるものあるは何ぞや。怪む勿れ、人類は情と性とよ於ては、至て感動し易き動物なれば、聊かにても抵觸せる所のものを感じ得ると、恰も精密なる驗温器が微温弱寒を感ずるが如し。

吾人は、勞働問題に於て、勞働者と資本主とを調和する策として効果ありとする所のものは、理論的方法にあるよりも、寧ろ性情的方法にありと信す。人は多くの場合に於て、又多くの時間に於て、情の動物なり。故に情の成立せる處、和氣霽然たるものあるは自然の勢あり。資本主情を以て勞働者を率き、勞働者も亦情を以て其役に服すとせば、何ぞ其間に交渉の衝突起るとあらんや。抑も勞働は個人生命にして、又社會の生命あり、勞働まければ生活なく、社會なし、人類は實に勞働する爲めに生れ

來れるにあらすや、勞働して以て樂み遊ばんとするにあらす、却て眠るも、息ふも、食するも、着るも、皆を勞働せんが爲あり。是れ勞働を稱えて神聖ありと爲す所以あり。古來勞働を卑むる風習甚だ堅固ありしが、今日にては、世人多く其性質決して卑むべき分子を含有せざることを認識し、終に識者をして職業神聖論を唱道せしむるに至れり。是れ實に勞働の生命たることを發見せしに因らすんばあらず。果して然らば、社會は其進歩と勞働との間に如何なる關係を存立せしむるか。彼の社會問題として唱道せらるゝものは、勞働を如何に議論するか、思ふに社會問題の主中點は、勞働不平均を改良するにあるが如し。勞働者は熱汗を拭り、嚴寒に晒さるゝも、尙ほ餘裕あるなく、富豪者は坐食して尙ほ益々富豪となる。此の如くして進まば、勞働者は終に社會の爲めに勞働するにあらす、將又自己の爲めに勤勉するにあらすして、富豪の爲めに勞力を消費せざるを得ず。彼の歐米の社會の狀態を聞く、富者多くは貧者の膏血に衣食し貧者は希望なく、元氣なく、安逸なく、餘裕なく、未明より深更に至るまで勞働し、以て漸く生計を凌ぎ、勞働せる結果は僅らに其小部分を私有するに過ぎず、其製作せる物品は悉く富者を粧飾する資料に供せらる。此の如くして彼等安心満足を生活に求むるを得んや。罪惡放蕩は皆此等の事情より生じ來れるなり。自殺者の多寡は、即ち富豪と貧者との交渉の衝突の度合を測る分度器にあらすや。生存競争は決して排斥すべきものにあらず、然れども人類は、何くまでも人類として生存せざる可らざるものなれば、徒に競争によりて私慾を逞ふべきにあらず。人生に於て情と愛と誠と涙とを除き去らば、社會は乾燥無味となり、終には殘忍酷薄の禽獸社會と等しきに至らん。人生此に至りて果して幾何の價值かある、其尊貴すべき點何くにかある。嗚呼社會に於ける交渉眞に難ひ哉。吾人は再言す、勞働問題は理論的考究を要するは勿論ありと雖も、此問題は理論のミを

以て解釋し盡すべきにあらざること。

吾人は此事を推考しても、自他性情の衝突即ち感情の行違は、其間の交渉をして亂雜からせめ、兩者をして相反目せしむるに至ることを識認す。

人生は猶ほ長途を旅行するが如し、若し旅伴をければ寂寞無聊に堪え難かるべし。吾人は人生に於て已と行を全ふする者、少しにても多からんとを望まずんばならず。而して吾人は信ず、若し得ざる可らざる財寶ありとせば、此旅伴に勝る財寶はあかるべし。嗚呼心と心と相和せる友は眞に幸福なる哉。心友は第二の我あり、我の生命なり、人生必ずや心友をかるべからず。

## 詩 人 論 (其六)

情想的詩人

戯曲詩人の題目

戯曲が叙情詩さては叙事詩と相差異するは其現はず兩詩人が戯曲詩人と相異なる所を論じたるに由りて多少明らかに成りつらむ。然らば即ち戯曲の材料——戯曲詩人が潛心一意、精微に到りて終らんとする材料は果して何ぞや。曰く人心の變動あり。この變動や、或は忽然として幽魂に誘はれ生じ、(ハムレットの如く)或は鮮血淋漓たる屍に對して起り(マクベスの如く)さては孤燈明滅せる帳中に生ず。(ブルタヌの如く)而して其此を描かんとするや、オフエリヤあり、妖女あり、或は羅馬府民あり。蓋戯曲の重する所と叙事詩の重する所とは自ら差異あり。そは一は事件を主とて、一は其事件を生む人の心を主とせんとすればなり。さまば一言以て戯曲の材料とある者を云はせめば、人心即ち是を

鎌 田 辰 郎